〈学術研究集会傍聴記〉

20th annual Congress of the European College of Sports Science 傍聴記

位髙　駿夫*

Toshio ITAKA*

2015年６月24日から27日まで，スウェーデンのマルメで開催されたヨーロッパスポーツ科学会議（ECSS）に参加した．この学会は今回で20回目になる大きな国際学会である．そこにはヨーロッパを中心にスポーツ科学に関連する研究者が多く参加するが，日本やオーストラリア，ブラジルなどからの参加者も多い．発表は運動生理学やスポーツ医学だけでなく，心理学や社会学などまで幅広いのが特徴である．今回の発表形式は Oral presentation（10分間の発表，５分間の質疑応答），Mini-Oral presentation（2分間の発表，２分間の質疑応答），E-Poster（ポスター展示のみ）の３つに分類された．

私は今回，筆頭著者としてMini-Oral presentationで「Association between the IGF2/ACE genotype combination and judo status」，共同研究者として E-poster で「The relationship between exercise of intensity and blood lactate concentration in running fitness with contact and without contact」という２演題を発表した．私の筆頭著者の発表は，Young Investigate Award （YIA）に応募し，事前の選考によって応募総数の355演題から120演題に選ばれ，Award 審査対象となったため，発表会場に審査員が４名いる中での発表となった．今回の学会では初めて審査される側での発表となり，プレゼンテーションと質疑応答の難しさを再認識することとなった．

プレゼンテーションは発表内容を相手に理解させ，納得させて，そして共感させることが重要だと考える．今回の私の発表は発表内容の事前準備によって理解は可能であったと感じるが，納得や共感の不完全さを感じる．母国語でない言語での発表により，コミュニケーション能力が減少したことに加え，相手にデータの面白さの共感をうませることが難しかった．つまり，国際学会において，言語は基本であり，その上を目指さなくてはいけず，まだチャレンジしていく部分が多いと感じた．

しかし，国際学会はそれができないと参加してはいけない場かというとそうではない．しっかりとした研究によって得られたデータは，十分な準備等によって，自分を高めることに繋がる．さらにその発表によって，周りからの反応や刺激が多いのも国際学会の特徴であると感じた．また，私はスポーツの競技能力を遺伝子多型検討しているが，「The Athlete's Biological Passport−What's the Status」は興味深く聞くことができた．一つ以上は自分の関心のある世界的に最新の話題に触れることができ，詳細を理解できなかったとしても，多くの調べる事項がうまれ，考えの視野が広まり有意義な時間となる．さらに，専門でない分野でもついていこうとすることから生まれる発見や知識の増加も見込むことができるのも魅力である．

国際学会は参加者の努力や捉え方次第でいくらでも成長の可能性がある場所だ．今後もしっかりとした研究を行い，その成果を発表できるように取り組んでいきたいと気が引き締まった．

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sport Science, Juntendo University